

ドイツでの在外研究

もう12年も前のことになるが、2012年10月から1年間、ドイツ連邦共和国ニーダーザクセン州ブラウンシュヴァイクにあるヨハン・ハインリヒ・フォン・チューネン研究所(以下、チューネン研究所)で研究する機会を得た。当時、勤めていた農研機構の若手研究員を対象とした在外研究制度を利用した渡独であった。チューネン研究所はドイツの国立研究機関で、農業に関する社会科学系の研究だけでなく自然科学系の研究も幅広く行い、ちょうど日本の農研機構と似た組織である。当時の私は農研機構に入所して6年目で、入所と同時に始めた北海道の畑作研究も5年が経過していた。

北海道の畑作地域では欧米メーカーの大型機械を個別経営が使うことも少なくない。在外先にドイツを選んだのは、2007年度から2011年度まで勤務していた農研機構北海道農業研究センターがドイツ製てん菜収穫機を購入し、その使用状況を調査するために出かけていったドイツで、チューネン研究所が実施していたプロジェクトが自分の興味と一致していたことを知ったからだ。幸い、チューネン研究所側は、農研機構の在外研究制度を利用した若手研究員の受入に寛容であった。

日本で農業経営に出向いて聞き取り調査を行っていた私は、ドイツでも同じような調査がしたいと目論んでいた。農村を自由に動き回るには移動手段が必要だと考え、入国早々憧れのフォルクスワーゲンのゴルフを中古で手に入れた。車の購入を急ぎ過ぎて、住民登録よりも前に納車となり、住民登録後でなければ入手できないナンバープレートがないまま、駐車場に車を放置せざるをえない期間もあった。ナンバー登録を済ませると、右側通行、左ハンドル車の運転に慣れるために早々に通勤に車を利用し毎日運転の練習をした。チューネン研究所の同僚らは、ドイツ語もろくに話せない私が、突如として車で通勤したことに大変驚いていた。今でもチューネン研究所の同僚らに会うと、私の車の購入話が話題に上る。

私はドイツ語をほとんど話すことができなかったのも、英語でコミュニケーションが取れる経営を職場で紹介してもらった。農業生産という共通の話題があ

るので、下手な英語でもなんとかコミュニケーションは取れた。ただ、語学のハンディでは説明のつかないすれ違いを何度か経験した。単語の意味の違いである。例えば、direct seeding。北海道では「直播」の意味で用いられ、「移植」との対比で使われている。一方、ドイツでは、「不耕起栽培」を意味し、耕起栽培との違いで用いられている。また、industry potatoも意味の異なる単語として記憶している。日本では、でん粉原料用のバレイショを指し、ポテトチップスやサラダなどに加工されるバレイショはpotato for processingが使われる。一方、ドイツでは、industry potatoは産業用のバレイショで、でん粉原料用だけではなく食品産業用であるポテトチップスやフライドポテトに加工されるものも含む。単語がシンプルなのに、お互いに説明なく当たり前に使っているので意味の違いに気が付きにくい。しばらく話して、どうも話が通じないとなって初めて意味の違いに気がつく場面がいくつかあった。

ドイツで調査をしていると、よく「日本はどうか？」と聞かれた。相手に質問すると、こちら側の情報に興味を持つのは自然なことであろう。初めに書いたように、私は北海道の畑作研究を始めて5年が経過していた。北海道にいた5年間は、時間が許す限り生産現場に出向いた。農協の担当者とよく話し、管内経営の土地利用の状況や栽培に関する考え方を教えてもらった。経営者らには作業日誌を付けてもらい、作業の状況も見せてもらった。収支に関するデータも、提供してもらっていた。それでも、すべての情報が入手できていたわけではないし、頭に入っていたわけではない。ただ、ドイツで受けた質問は、誰に聞けば正確な情報にたどり着けるかは分かっていた。分からない質問を受け、ドイツから北海道に連絡し、最新の情報を得たことが何度かあった。

新型コロナウイルス感染症のまん延で、インターネットを通じたやりとりが便利になった。自室から世界中に繋がれるようになったが、現地に出向いて直接話すことでしか得られない情報もまだまだ多い。調査の軸となる国内情報を携え、海外調査に出かけていく価値は、ネット社会になっても変わらないと思う。

今年の4月より農研機構から大学に移ったが、学生および若手研究者の海外経験を後押ししていきたいと考えている。

(東北大学 大学院農学研究科・農学部 教授 関根久子・せきね ひさこ)